

「我、長男なり」

明星学園 宮下 智

M男さんの父親が亡くなった。白血病の宣告を受けてからわずか2ヶ月ばかり後の出来ことだった。2ヶ月前、私たちはM男さんとお父さんと妹さんとで、その情報を共有している。

お父さんは、12月、極度の食欲不振と体のだるさを訴えて通院している。そこで頂いた診断は「もう手遅れの白血病」、延命措置は可能だが、治療の方法はないという宣告だった。最短12月末まで持つかどうか、輸血をすれば、延命できるが、いつ何が起こっても不思議ではない状況であることを説明されている。

「M男さんには、どのように伝えたら良いでしょうか？」妹さんからの相談に私たちはこのように答えている。

「今までもM男さんには、たくさんのことを包み隠さず伝え相談してきました。おばあちゃんが亡くなった時も、お母さんが倒れた時も、そうしてきました。その都度、病院にお見舞いに行ったり、お葬式に参加したり、お墓参りに出かけたり、その全てをM男さんは受け止め、時にはその出来事の大きさに受け止めきれず、てんかん発作が誘発された時もありましたが、確実にそれを乗り越えて来られました。常にM男さんの意志を家族の皆さん全員が受け止め、たとえ家族の皆さんの意見に背くようなことをM男さんが言った時でさえも、一せっかくの家族旅行の誘いを遠過ぎる、長過ぎると断ろうとしたこともありましたがねーその気持ちを一人前の大人の意見として大切にしておさった家族の歴史は、考えられないほど大きな前向きなエネルギーをM男さんに与えていると思います。今のM男さんだったら、きっとお父さんの病気のことをきっと受け止められると思いますし、きっと教えて欲しいと思っています。確かに、てんかん発作が重積になる可能性はあると思います。でもそこは私たちが責任を持ってケアさせて頂きます。包み隠さず、M男さんに全て話して、お父さんがもうすぐ亡くなってしまうことを理解した上で、心の準備をしていくことが良いと思います。」

次回の面会時に、お父さんと妹さんとで直接M男さんにその内容を伝えることが決まった。

* * * * *

面会は2週間に一回程度と決めた。お父さんと妹さんとが一緒に来ることができるようであれば、学園に来て頂く形で、お父さんの体力が低下したり、妹さんの都合がつかないようであれば、職員がM男さんを伴って実家を訪ねる形を採って実施することにした。年末は、家庭の負担を考えれば、宿泊無しという方法もあったが、これが最後のお年取りになるだろうということで、一泊の帰省にすることに決めた。面会・帰省時にはたくさんの写真とビデオを撮影することにした。M男さんと職員が家族の思い出を共有できるようにと、今までの家族の思い出が詰まった写真の数々を動画に編集して、DVDプレーヤーで見ることができるよう準備した。カウントダウンが始まった。

* * * * *

おばあさんが亡くなったのは、12月31日だった。奇しくもM男さんの帰省日だった。家へ帰ったらそこでおばあちゃんが亡くなっていた。僕って家へ帰って来てはいけないんだろうか？そんな考えが、頭にこびりついたまま離れなくなった。

お母さんが倒れたのは、M男さんの排泄の介助の途中だった。お母さんが倒れたのをM男さんは目の前で見ていたことになる。脳溢血だった。お母さんは僕のせいで倒れた…、彼がそう固く思っているのも不思議ではなかった。その後の癌の闘病、M男さんが病院へのお見舞いに伺ったその次の日の朝、お母さんは亡くなった。お母さんの最後の気がかりはM男さんだったのだろう。

* * * * *

ある時、車椅子に座っているM男さんを挟んで、父と母の間で、大きな声で言い合いが始まった。仲の良いご夫婦だったから、決して夫婦喧嘩ではなかったのだが、間に挟まれたM男さんにてんかん発作が襲った。僕のことが原因でお父さん、お母さんが喧嘩している…、ちょうど通りかかった私は声をかけた。「M男さんが、お父さん、お母さん、僕のことで喧嘩しないでとお願いしていますよ。」一年ぶりのてんかん発作だった。

* * * * *

度々、彼は帰省時に服薬拒否をしている。断固として抗てんかん剤を服薬しないのだ。かといってそれは毎回のことではない。情報を集めると父親が酔っぱらっているときには服薬をしていないことが判明した。「お父さん、お酒飲まないで。せめて僕の帰省しているときくらいは、お酒我慢して欲しいな…」願いが通じて、お酒を飲まない帰省の時には、彼は完全に服薬して帰園した。彼は命を懸けて父の飲酒に抗議をしていたのだ。父親の酔っ払い姿を見るのも嫌だったのだろうが、おそらく健康を心配してのことだったのだろう。お父さん、元気で長生きしてね…と。

* * * * *

父親の訃報が届いたその夜、同僚Kさんの大声が止まらない。聞けば、M男さんのお父さんが死んでしまったことを口にしてしている。夜勤の職員がM男さんの居室にKさんを誘うと、おもむろにやってきたKさん、必死にM男さんに話しかける。「お父さん、死んじゃった…、お父さん死んじゃった…」しかし、M男さん、その繰り返される話しかけに拒否もせず、うるさがりもせず、目をまん丸くして耳を傾けている。その度に頷くようにして、その話を聴いている。その精一杯の話しかけに励ましの気持ちを感じているのだろう。Kさん、そんなことをしたこと今まで一度もないのに眠りに入ったM男さんの横で、添い寝するかのように横になり、一時間半ほど過ごし、その後自分の居室に戻った。二年前に母親を事故で急に亡くしているKさんの見せた優しさだった。そしてその優しさをしっかり受け止めることのできるM男さんがそこにいた。

* * * * *

M男さんのお別れの言葉が始まった。てんかん発作を心配して、彼の両脇を付き添いの職員が固めている。もちろん彼は、しゃべることができないから、お別れの言葉の文面は、O×カードと表情カードを用いて担当職員と共同で作成している。そして職員の代読だ。

「…お酒を飲んでいるお父さん、たばこを吸っているお父さん…旅行に連れていってくれたお父さん…、僕が初めて仕事をして貯めたお金で買った帽子をととても喜んでくれたお父さん…、いろいろなことがあったけど、どんなお父さんもみんな好きです。」参列者の涙を誘った。

そして、精進落とし。彼の日常の精神力や体力を考えて、参加できるところまで参加して、てんかん発作が起きそうになったり、落ち着かないような状況になったら、退席するという約束の精進落としだったが、M男さんの大好物のウインナーソーセージが特別に用意されるという破格な待遇、家族、親戚の皆さんがそれぞれにM男さんの元に訪れ、Mたん、Mたんとして声をかけてくれる温かさに包まれて、彼はいつまでも退席しようとしなかった。そして散会。それでも彼は帰ろうとしない。

関係者がそれぞれ家路につき、親戚一同がマイクロバスに乗車、そのバスが出ていく。そのバスを見送るようにして、彼はやっと学園に戻る車の方向に歩みだした。

彼には、お嫁に行ったお姉さんがいる。そして、いつも面倒を見てくれる妹さんがいる。真ん中に挟まれた長男だ。本来なら彼が喪主を務めるはずの役回りだ。長男なんだから。もちろん彼には世間でいうような喪主は務まるはずもない。しかし、私には、彼が今できる精一杯を長男として果たそうとしたのではないかと思える。

お別れの言葉の時の立派な立位の姿勢、葬儀の開始から火葬場での時間、そして精進落としまでの完全参加、そして親戚一同の皆さんが乗るバスの見送り。

一言も発することができない彼なのだが、なされた行動は喪主そのものだろう。

「皆さん、本日は、本当にありがとうございました。僕はこうして明星学園で元気にやっています。そして明星学園には支えてくれる仲間もいます。どうぞ安心して下さい。姉、妹ともどもこれからも宜しくお願いします」

M男さんの期待に、私たちは応え続けることができるだろうか？

WELCOME TO SATORU WORLD

障がい者支援施設 明星学園における心のケア

<http://homepage3.nifty.com/myojo-satoru/>